

現代文

第1回  
読解編

① 日本でも一九八〇年代にはさかんに国際化が必要であると言われました。その場合の国際化の内容は、ある意味ではアメリカや西ヨーロッパの近代世界が発達させてきた物事の基準に適合させることでした。国際化への適合の必要というのは、日本の文化と社会が作りあげてきた欧米型とは違ったシステムを、アメリカや西ヨーロッパの持ついろいろなシステムに適合させなくてはいけない、という意味で言われました。

② いろいろなレベルで国際化という言葉が使われるにしても、その基準は、たとえば日本にとっては、自由主義世界の欧・米がつくりだし、しかも日本が参加することによって利益を受けると思われるような経済・金融市場化であり、人権や民主化といった言葉で表される政治システムであり、科学技術の発達を仏いかに利用するかという点での国際的な基準といったことでした。日本も一部はその発達に貢献しつつ、日本的なシステムをそれに合わせていこう、あるいは合わせなくてはいけないという動きであったのです。

③ つまり、日本が国際化と言った場合には、旧ソビエト圏や中国は視野に入っていなかったわけで、適合させなくてはいけないモデルやシステムとしてそれらの国々や地域や社会を捉えることは、全くなされませんでした。ですから、社会主義圏には社会主義圏の中での国際化があるというように了解されていたことになります。ロシア・システムや中国システムということなのでしょう。私はタシュケントで、ロシア・システムの作用を目の当たりにしました。これからはむしろアメリカ・システムに変わるといふ人もいますが、言葉も含めて、そこに働くシステムはロシア・システムでした。

④ しかし、東西のイデオロギー対立がなくなった一九九〇年代には、国際化という場合にも、ソビエト圏であれ東欧圏であれ等しく守らなくてはいけない、あるいは達成しなくてはいけない世界のモデルがある、と認識されてきました。そこで出てきた言葉がグローバル化、全地球を覆う形での展開と捉えられる言葉です。グローバル化という言葉には論者によってさまざまに異なる意味が付与されていますが、この言葉が広く使われるようになったのには、そうした背景があるとと思います。

⑤ 特に新世紀に入ってますますグローバル化という言葉が使われ、またグローバル化に即した対応を各国、各社会が迫られるという点では、近代化と言われたときよりも強い大きな意味を持つようになっていきます。しかし同時に、一九九〇年代に始まる世界の変化の認識は、人間と社会の現実には文化的に多様であり、社会も民族も言語も非常に多様であるということです。それがグローバル化の中で初めて強く認識されたということもまた事実なのです。

⑥ すなわち、世界を同じシステムにしようとするグローバル化の流れの中で明らかになってきたことは、「文化の多様性」の認識であるかと思います。人間の世界は、表面的には科学技術の発達を共有することによる共通化あるいは一様化という現象が加速されてきたように見えます。

⑦ グローバル化が進めば進むほど、文化の違い、価値の違い、生き方の違い、それぞれが目標とするものの違いも明らかにになってきました。グローバル化は、欧・米的なシステム、特にアメリカ的なシステムで世界を統合しようとする動きとしても強く表れています。グローバル化といえばアメリカ化だと言う人も多いわけです。グローバル化が多様性と共存する方向に向かわずに、どちらかという同一化、画一化に向かうことへの危機感が世界各地に非常に強くあり、日本の中でもそれを指摘する人もいます。



